

平成 28 年度第 1 回福岡市美術館協議会 会議録

日 時	平成 28 年 8 月 10 日 (木) 14:00～16:00
場 所	福岡市美術館 教養講座室
出席者	協議会委員：後藤会長外 計 16 名 福岡市美術館：錦織館長外 計 11 名 福岡アジア美術館：森館長外 計 7 名
議題	(1) 正副会長の選任 (2) 福岡市美術館平成 27 年度事業報告について (3) 福岡アジア美術館平成 27 年度事業報告について (4) その他

1 開会

2 館長挨拶 (内容省略)

錦織福岡市美術館館長挨拶

3 議題

(1) 正副会長の選任

事務局： 福岡市美術館条例第17条，福岡市美術館条例施行規則第23条に基づき，委員の互選により定めるということになっているが，どなたか会長，副会長へのご意見はないか。ご意見がなければ，事務局としては会長を引き続き，後藤委員に，また，副会長を植野委員にお願いしたい。異議がなければ，拍手をもってご承認いただきたいがよろしいか。(拍手) それでは，会長を後藤委員，副会長を植野委員にお願いする。

(2) 福岡市美術館平成 27 年度事業報告について

事務局より報告

(3) 福岡アジア美術館平成27年度事業報告について

事務局より報告

会長： 福岡市美術館，福岡アジア美術館の事業報告について質問等をどうぞ。特に，今回は 5 人の委員の方が新任ということで，新鮮な意見をいただきたい。

委員： 福岡市美術館，福岡アジア美術館の存在意義とコンセプトは何か。

事務局： 福岡市美術館は市立の美術館として1979年に開館し，今年で37年になる。元々西日本の中核となるような総合的な美術館として歩み続けている。収集方針については，郷土の物だけでなく，内外のモダンアートも積極的に集め，また，古美術についても開館当時は寄贈が中心だったが，その後積極的に購入をしている。近現代美術と古美術両方の部門で収集活動や展覧会活動をしているこ

とが大きなコンセプトの一つである。

また、総合的な美術館に求められるギャラリー機能や、大規模な公募展や巡回展の開催、そして積極的な自主企画展の開催も特色の一つである。展覧会については、なるべく地域やジャンル、時代も含めて多彩なものを提供しており、近現代美術、古美術だけでなくサブカルチャーという分野にも積極的に取り組んでいることも大きな特色であり、コンセプトでもある。

事務局： 福岡アジア美術館は1999年に開館し、すでに17年が経過しているが、現在に至るまで、少なくとも日本の中ではアジアの近現代美術に特化した美術館は他になく、また、世界的に見ても当館ほど幅広いジャンルや時代をカバーしたアジアの近代・現代美術をコレクションし、展示し、アジアのアーティストを招聘し継続してアジアの近現代美術を紹介している美術館はない。日本の近代化の歴史において、フランスほか欧米の技術・文化の圧倒的な影響の中に日本の美術、あるいは美術館というものが発展していたので、それに対し日本が本来アジアの一部であり、アジアの一員としてアジアのアーティストや研究者等と一緒にアジアの美術の価値を世界に紹介していくこと、またそうすることで日本人のアジア文化への理解、協働、共生等の意識を高めることが当館の特別の意義だと思う。

委員： 福岡市の総合戦略の位置づけとして美術館をどのように考えているか、今のコンセプトと関連付けて教えてほしい。

事務局： 市の中の位置づけとしては、市民への文化芸術意識の向上及び振興としての役割の中で、特に芸術部門では両館とも大きな柱として機能するという位置づけである。昨今はそれに留まらず、集客や観光の視点も含めて、両館を活用していこうと展開しているところである。

委員： 福岡市はアジアのリーダー都市として打ち出されており、文化的な豊かさ、多彩さを出しているが、そのことと戦略的に2館の連携がもう少し図られるべきではないか。また、その視点に立つならば、もう少し予算を割くべきであるし、戦略的にアジアのリーダー都市として市が打ち出すなら、近年減少している美術品の購入予算を含めて、もう少し手厚く、様々な手当てをするべきだと思うし、その中で美術館側も機能を打ち出すならば予算を獲得できるのではないかと思う。どのような都市になりたいかという都市像と、アジア史的な視点からどのように位置づけるかという両面からお互いが見ていく必要があると思う。そういう視点でやると、美術館がもう少し手厚くなり、都市としての力が上がると思うので、市と一緒に考えてほしい。両館とも特徴的なコンセプトがあり良い活動をしていると思うが、もったいないイメージがあるので、行政側と美術館側両方が考えるという両者の良い関係が都市力を上げると思う。ご検討いただきたい。

会長： 開館以来両館の活動を近くで見えてきたが、学芸員をはじめ事務局等非常に気合を入れて活動している。委員の方々には、先ほどの戦略的な位置づけや予算等の発言の様な具体的なアイデアをこの場でご提言いただきたい。

委員： 美術品の購入予算については、他の美術館でも少ない。先ほどの説明で用途を特定して納税する

ふるさと納税の話があったが、福岡市民でも使途を特定して納税できるシステムがあるのか。

事務局： ふるさと納税は全国的な制度であるが、福岡市ではふくおか応援寄付という名称で実施している。この制度は福岡市民が福岡市に寄付することも可能であり、ふくおか応援寄付の場合は、福岡城の整備や当館等の様々な使途を示しており、寄付をした方には控除を受けられる。おおよそ寄付金額から2,000円が自己負担になり、それ以外の金額が控除として戻ってくる。また、その2,000円についても、あまおうや牡蠣をプレゼントしているので、大体寄付額全額が価値としては手元に戻ってくる。福岡市美術館に福岡市の方が寄付していただければ、美術館の購入予算が増えることになる。

委員： 使途は選択肢に限られているのか。例えば福岡アジア美術館の購入予算に充ててもらえるのか。

事務局： 現状の制度では福岡アジア美術館は選択肢に入っていない。

会長： この制度は行政的にもっとアピールするべきだ。市政だより等で我々市民がわかるように広報してはどうか。

事務局： 美術品の収集予算がなかなか確保できていないので、何らかの形で皆様からの寄付を多く集める方法を現在検討しているので、寄付が得られやすいよう広報していきたい。

委員： 全国の美術館で福岡市美術館が一番美術品の購入予算が多い時があった。現在は、福岡アジア美術館は購入しているが、福岡市美術館は予算がない。寄贈作品を今以上に拡大して受け入れてはどうか。

会長： 今回の報告内容について、予算以外でも何か意見等をいただきたい。

委員： 福岡市美術館の「モネ展」は非常に多くの人 coming ているが、一方で、福岡アジア美術館の「日韓近代美術家のまなざし」展は4,000人弱しか来っていないにもかかわらず「美連協大賞」を受賞している。最近では多くの人 coming なければ風当たりが強いかもかもしれないが、企画としては非常に大事なので、今後も続けてほしい。

福岡市美術館は、常設展を様々なテーマで工夫していて非常に興味深いのが、ダリや西洋の近現代の作品で良いものが多くあるので、これらを活用した展覧会をもっと企画してほしい。多くの所蔵品を万遍なく活用できるような常設展を企画してほしい。

事務局： 非常に多くの所蔵品をどのように見せていくかというのは大きな課題である。1つの作品を核にしてどれだけ展開力のある切り口を見つけられるか努力していきたい。

事務局： 常設のコレクションの見せ方について、最近始めていることだが、常設展の作品や位置は変わらないが、その中にコンセプトを埋め込むことで、お客の見る視点が変わるのではということを考えている。同じ作品を多角的な角度から検証したり楽しんだりすることを今後とも続けていきたい。

事務局： テーマを設けての展示以外に近代から現代までの流れに沿った展示をしている。今後は福岡市美術館が所蔵するアジア関連の作品を活用して福岡アジア美術館の常設展示の流れを再構成していきたい。

事務局： 美術館のイメージや価値を大きくするのは所蔵品、あるいは所蔵品を使つての展示であり、所蔵

品による展示が美術館の核になっていかなければならないと思う。

美術品の購入予算は、この美術館ができた当初から徐々に減っているが、学芸員の努力や今までの経験の中で質の高い寄贈作品が毎年数多くある。しかし、寄贈作品ばかりになると、系統的なコレクションの形成がしにくい。系統的なことを考えると、購入予算が将来的には必要と思う。どこの美術館でも所蔵品の質を上げて所蔵品を中心に展覧会を組み、それを多くの人に知ってもらって見に来てもらうことが望ましい形だと思う。

委員：アジアのリーダー都市という今とは違う文脈に美術館を位置づけることで美術品の購入予算を確保できる可能性がある。福岡市に限らず文化業界は予算確保で一度だめだと言われただけで諦めていると聞く。市議会議員全員や行政の予算担当に美術館関係の人が美術品を購入する意義を何十回と説いているのか。それをして初めて予算が確保できる。予算を確保して良い美術品を購入するという王道に戻すために皆さんの力や説得力等を動員しなければならないし、この協議会の委員の方々も意義を発信してほしい。

事務局：アジアのリーダー都市については元々80年代後半からアジアの交流拠点都市を目指すという市のストーリーがあり、それに基づき福岡アジア美術館という世界的に珍しい美術館ができた。

最近福岡市の施策としてインバウンドの促進に重点を置いているので議員や行政トップに説明する際に今までの文脈ではなく、新しい文脈を利用していかなければならないと思う。

今年度から作品解説などについて4ヶ国語対応を本格的に始めており、福岡アジア美術館で昨年度から実施しているアンケートによると、欧米人観光客がアジア人観光客と同等数いる。

海外からの観光客が多く、特別展ではなく常時見られるコレクション展で人に来てもらわなければならないというストーリーが作れればいいと思う。

会長：福岡市美術館や福岡アジア美術館が開館した当時の状況と変わっているのもう一度戦略的に立ち位置を定義しなおして活動していくという、重要な時期になってきていると思う。

委員：福岡市の小学校では理科の出前事業があり大学の先生が学校に来て理科の楽しさを講義してくれる。その予算は福岡市がもっている。以前、福岡アジア美術館は美術館の予算で学校を呼んでくれた。ここ数年は聞かない。豊かな心を持った子供を育てようと文科省が言っている。しかし、道徳の目標には豊かな情操という言葉は出てこない。豊かな情操を育むという言葉が出てくるのは音楽と図工と美術だけである。文科省が言っている豊かな心を、義務教育の中では音楽や図工、美術で育てると言っているのならば、それに予算を当然つけるべきだ。その視点からも将来の日本を担う子供のためにお金を使ってもらいたい。

授業実数の確保という観点から以前よりも学校から外に見学に行く時間が厳しくなっている。リニューアル休館中は出前講座の実施を検討してほしい。

事務局：休館中に学校に出向く準備を現在行っており、今年度については試験的に昨年度から交流のあった学校に出向くことになっているが、来年度からは公募をかけて出向き、鑑賞活動をする予定であ

る。

事務局： 以前は、福岡アジア美術トリエンナーレという大きな展覧会の中の予算で福岡アジア美術館に希望する学校をお呼びしていたが、現状の予算ではできない。小・中学校への出前講座やワークショップはアジアのアーティストと共に実施しているので、今後はより発展させていきたい。

会長： 福岡市美術館は9月から休館するのでアウトリーチ活動の可能性をより一層探っていただきたい。

委員： 以前、福岡アジア美術館の作家を障がい者施設に何名か連れてきていただいて一緒に絵を描き、ホールに展示をしたら、市民の方も喜んでいたし、作家同士として制作できたことは非常に良い経験だった。知的障がいのある方でアート活動をしている人は多く、自身のアート活動が生きるエネルギーになり、また、褒められることに食欲に反応する。美術館に作家という形で迎え入れられて表現することが、自身や家族、他の障がいのある方にも非常に力になる。今後もお願いしたい。

また、福岡アジア美術館の常設展示について久しぶりに見たが、昔と変わりがなく非常に残念だった。何度か見るうちに飽きられる。他館の美術品の貸し借りが頻繁にできるのであれば、美術館の所蔵品と組み合わせることで別のストーリーを作れば大きく印象が変わる作品が多数あると思う。大きな横のつながりがあれば、常設のやり取りの中でおもしろい企画展が生まれるのではないかと思う。

会長： 障がい者の美術はアウトサイダーアートやアールブリュットという形で今までとは全く違った見方、見られ方をしていると思う。

委員： 福岡アジア美術館の「イマジン—争いのない世界へ」は福岡アジア美術館の独自性を際立たせており、非常に印象に残った。

福岡アジア美術館では、美術館に来ることが難しい子供たちに出張美術館という形で、病棟等で展覧会を開催していたが、27年度は実施しなかったのか。また、今後については継続していくのか。

事務局： 26年度までは「とびだせ！アジア美術館」で所蔵品を持ち出して、ワークショップや鑑賞会を実施していたが、予算が厳しく27年度から実施できていない。これまでレジデンスのアーティストが特別支援学校に行き、ワークショップや鑑賞会を実施していたので、このように予算のかからない形で今後も継続していきたい。

委員： 福岡には大学生・大学人や地域に根差そうとしているアーティストなど優秀な人材が多くいるが、美術館に入りこめていない。そういった人々の受け皿や発信場所としての新たな美術館の機能を考えていくべきだ。

会長： 東京等から出てきて福岡に定住しているアーティストは多い。そういった人材を積極的に引きずり込む活動が必要だと思う。

委員： 今回のリニューアルのような日本初の取組を意識的に複数やってほしい。

SNSで展覧会を広報・シェアすることで集客につながる。海外では、展覧会をオープン化してシ

ェアして広がっていくことが美術館でも主流になってきているが、日本ではクローズなところが多い。できない理由を考えるより前向きにマインドを変えることを意識した方がいい。

事務局： 28年度から常設展のうち古美術では撮影可にした。企画展についても、許可が出たものは撮影可にしたが、SNSへの掲載を推していなかった。

事務局： 28年度に実施した「物・語展」では9割の作品を撮影可にしていたが、写真をSNSに掲載した方は非常に少なかった。逆に現在開催中の「ゴジラ展」は何点か撮影可能にしているが、非常に多く掲載されている。撮影可にしてSNSに掲載されるかどうかは、展覧会の特性やお客さんの様態によると思うので研究していきたい。

委員： 観覧者数は重要な数字だが、数字と質は結びつかないので、質についても考えてほしい。数字に振り回されず質に目を向け、自信を持って活動してほしい。

4 館長挨拶（内容省略）

森福岡アジア美術館館長挨拶

5 閉会